

なる人格は一に大衆敬慕の中心でありました。或時は巷中に映画を觀覽してその批評に、又世相の波狀に就いての激論を演じ、或時は人間の生死に就いての根底を追究して四六時中即今底の只管工夫に精進し合つた管鮑の仲でありました。而るに無常の風は處かまはず吹きつけて洞爺丸と共に生緣即に盡き今や忽焉として師の遷化に接し悲雲寂寞として断腸に堪へません。千歳を誇る萬松山可睡禪裡に身心を托して一傘下に同釜の飯を喫し只管辨道の好因縁を忝うしたのも束の間時節到來に及んで、憂き波風の荒き世に西と東と袖を分ち一蓋の綱代笠と一枚の雨合羽を円覺伽藍として漂々として雲と共に溪々水と共に去つて一身を天地に托し、北海道に錫を飛ばし、計らずも海上の一不慮の厄難に遭遇せられた事は哀悼痛惜の情を禁じ得ません。

墨染の衣に念珠を手には掛け平和の光を祈念されつゝ海上の御守護として永遠に昭鑑を垂れ賜はらん事を。  
謹んで桑山良晃師の尊靈に捧げます。

### 從兄弟・良晃君素描

横濱市師岡永昌寺住職 三 堀 浩 一

良い意味でも悪い意味でも、良晃君は普通とは些か變つた所のある男だつた。從兄弟の一人として兎に角變つた所のある面白い存在と思つて、これから先どう變つてゆくか、どう成長してゆくかと興味さへもつてゐたのにほんとに不慮の事故で惜しい事をしてしまつたと思つてゐる。昭和廿七年の高祖さんの大遠忌の祖山拜登の団体参拜の五日間の旅の同行と、そのあと私の寺での開山忌と法制上堂の報恩法要を行つた時に、まめくしく立働いて呉れた時とが起居を

俱にした主なもので、その他は折にふれてゆききした位のものだが、純眞な所があるかと思ふと、また突拍子もなく大きな事を言ひ出したりして、大分變つた一面もあるにはあつたが、永平寺や越後の僧堂あたりで修行してゐた際の雲水姿で私の所にやつて來た折には、兎に角若いのにやることはやるわい、と思つて一應この先十年、どう成長するかと期待してゐたのに、人の世の一寸先はまことにわからぬものといふの外はない。

良晃君の遭難の悲報を療園に在りて知りて

洞爺丸遭難ニユースに從兄弟の名桑山良晃君廿三才があり  
大學卒へ僧堂を畢へ漸くに寺に歸れる從兄弟はかなし。

### 良晃君のこと

横濱市鶴見建功寺住職 柳 野 信 步

洞爺丸沈没の報せは全國民を悲しみの禍中に沈ませた大事件であると共に、又世界海難史上で二番目と云ふ稀に見る出來事であつた。この慘事を耳にして私も痛く恐愕したが、良晃君が遭難したと云ふ報に接して一層愕然としたのである。私と良晃君とは從兄同志に當るので、お互に物心がつく様になつてからの附合いは既に十數年になる。其れだけに双方共に性格などは十分に識つてゐる。良晃君は非常に野心家であり、且又、學究的な學徒でもあつた。酒を傾けては、歴史、社會、宗教などの問題に談論風發して青年らしい氣焔をあげた事では今尙忘れられない。そして、一流の論旨なり主張なりは、常に伝統的な慣習に批判を加え、封建的な制度に革新を叫んで止まない青年であつた。私自身宗教界に身を置き乍ら、やはり、同じ世代を叫吸する人間として、屢々良晃君の情熱に同調する

處が多かつたが、良晃君は今や不慮の遷化をとげている。叔父叔母の悲しみも又察するに余りがある。

私は嘗てあの魔の海を四回渡つた事がある。青森を出てから函館へ舩をつける迄四時間餘り、津輕、下北の兩半島に圍まれた船路は美しい。あの様に大惨事が起つた事などは丸で嘘の様である。私はこの船路を想い出し、また北海道のこと共に話題が進む時、あの千數百人の人々の魂の事が一時も忘れ得ない。そして此の人々の先立ちとなつて僧服を纏い經文を口に念じ乍ら船中の衆生を彼方に濟度した良晃君の事どもは私の胸に終生残るに違いない。近く東京灣を眼下に望める横須賀萬藏寺の境内に良晃君とその犠牲者の靈をまつる地藏尊が建立されると云ふ事である。良晃君の靈もつて瞑すべきである。

### 親しき友桑山さんに送る

可睡齋僧堂内

小野寺 秀和  
太田 正巳

あゝ洞爺丸。一瞬にして千有餘の人を一呑にして、儂く海底に沈んだ洞爺丸、其の中に親しき友桑山さんも居られたとは、只々餘りの驚きに漠然として夢うつつのやうに心が去來する。靜かに思ひを回らせば過去一年間の桑山さんは、永遠に忘れる事の出来ない人である。可睡齋安居中は桑山さんと、嬉しい時も悲しい時も共に手を取り合つて暮した事が目に浮ぶ、ある時は、寒中に水を被り行水に三昧した事もあり、又ある時は肝膽相照して共に一献傾けた事も想ひ出の一つとなつてしまつた。桑山さんは道心堅固で大衆欣慕の的であり、實に將來宗門を背負ふ有望な僧侶であつたと私達は信ずる。今は無き桑山さんの、教訓を只管に思ひ出して我々の今後行く

べき羅針盤として、愛宗護法に精進致します。願くは桑山さんよ、安らかに菩提を圓にせられて他界に機化せられん事を。

兄を偲んで

桑山 信晃

九月廿七日夜の事である。突然電報々々と云ふ聲に家中一瞬靜まり、やがてそれを讀み上げる聲に耳を傾けた。青函連絡局長發信「トウヤマルソウナンシタ、トリアエズシラス」。慌て、新聞を引出し、生存者の各名簿欄を繰返し見たが見當らず、家中の者は手分して郵便局や横須賀驛へ行き尋ねたが、北海道は台風の爲電報電話一切不通であつた。その後ラヂオで讀み上げた乗船者名簿の最後の方に桑山良晃とあつたので一瞬頭をガンと打たれた様な氣持ちで、取る物も不取敢、父と共に函館へ向つた。車中では唯無事々と祈るばかりで何を考へる事も出来なかつた。廿九日の早朝函館へ着いた。洞爺丸遭難對策本部へ証込み生存者名簿を二度三度と見たが兄の名は見附からず、係員に尋ねてもはつきりした答は得られず氣が焦るばかりであつた。慰靈堂へ行つて見ると三百坪もある堂内は、四百余の遺体で一杯になり足の踏み場もない程であつた。中には全く無傷で安らかに眠つてゐる様なものもあるが、最後迄匍き苦しみ両手で虚空を掴んだ儘事切れてゐるものもあり、その殆んどの人達は砂濱に敲附けられ、砂濱を這上つては波に引摺られ又這上つては引摺られるのを繰返し乍ら力盡きて死んでしまつたものらしい。目鼻口等に砂がめりこんで居るのはそれを物語つてゐるのであらう。一番胸を締附けられたのは若い母親とその子供の姿であつた。母親は顔